登竜門（水生蜘蛛屋敷）

星見　童祭

水面から、崩れたビルや壊れた信号機が顔を出している。放置され、風化したそれらは、水没した過去の遺産である。しかし、今は誰も見向きもしない。

男が、船から木組みの桟橋に降り立った。埼玉から来た雑誌記者で、高田一郎という名前である。

一郎は、橋の先にある屋敷を眺めた。

廃墟が沈む海には場違いの、大きな日本家屋。壁は真っ白で、どうやったのか瓦まで一枚一枚丁寧に葺かれている。わざわざこんな場所に家を建てるなんてよほどの物好きだ、と一郎は思った。

一郎が桟橋を渡り、門のボタンを押すと、玄関の引き戸を開けて、主人の藤山悠樹が現れた。和服姿で、小太りで背も低いが、どこか余裕が感じられる男だった。

「ご連絡しておりました、柳雑誌社の高田一郎です。これからしばらくの間よろしくお願いします」

一郎がお辞儀をすると、悠樹は慌ててそれよりも深く頭を下げた。

「いや、ご丁寧にどうも。遠くからこんなところに。こちらこそよろしくお願いします」

悠樹は、一郎が考えていたよりも腰の低い男だった。

「ではええと、とりあえず応接間にご案内します」

「はい。お世話になります」

一郎は靴を脱ぎ、悠樹の後に続いて、両端に襖のある長い廊下を歩いた。丁寧に磨かれた、綺麗な檜の廊下だった。

そうして和室の応接間に入ると、しかし、部屋には先客がいた。女がソファに座って、机に置いてあるノートパソコンに何か打ち込んでいる。二十歳ぐらいの若い女で、髪はきちんとまとめられ、Tシャツと青いジャージの、動きやすい恰好をしていた。

「おっ？」女は一郎に気づいて顔を上げると、少し硬直した後、はっとして一郎を指さした。

「あれだ、記者！」

「すまんすまん」女はパソコンを閉じて、申し訳なさそうに立ち上がる。そうして、「そうか、そうだよな、ここ使うよな」とぶつぶつ言いながら、一郎の横を通って出ていった。

「さっきの方は？」

ずいぶん気楽だったので、娘か何かかと思いながら一郎は言った。

「あの方はここの用心棒です」こともなげに言って悠樹はソファに腰を下ろした。一郎も向かいのソファに座り、取材が始まる。

企画の趣旨をもう一度確認し、紙面を埋めるのに使えそうな情報を聞き出しながらも、一郎の頭にはさっきの女のことが引っ掛かっていた。「用心棒」という、到底馴染みのない言葉を実際に職業にしている人間に興味を持っていたのだった。

夜。十畳の広い客間の隅で一郎が荷物の整理をしていると、件の用心棒が襖を開けて顔を出した。

「夜分にどうもね」そう言うと、女は顔の前で手刀を作って軽く頭を下げた。「昼間は申し訳なかった。フジヤマさんの部屋とあそこしか、ソファがないもんだから……」

「ああいや、別に大丈夫ですよ」

一郎が言うと、女は気後れなく客間に入ってきた。そのまま畳にあぐらをかいて、無造作に座る。

女は、水上沙織と名乗った。沙織は表情と手ぶりをころころ変えながら、この屋敷にはもう四年間住み込んで

いて、この屋敷のことなら全部の部屋の畳の枚数まで分かる、と語った。
「なんの取材で来てるんだっけ？」
語りに区切りがついたころ、ふと沙織が聞く。
「ここのご主人の取材です。ご主人は山形で一番のお金持ちだそうですから」
「なんて企画なんだ？」
「……」一郎は手を止め、口をつぐんだ。しかし女が答えを待ったままじっと見つめてくるので、一郎は観念して口を開いた。
『突撃！　埼玉外の富豪さん』です」
「ひっでえ名前」沙織が息を殺して笑う。
「まあ僕もそう思いますよ……」一郎はため息をついた。上司が発案の名前で、一郎は従っただけであった。
自分に比べ、この人はなんて気楽そうだろう。同じ人間なのに、場所だけでここまで違いが出るのかと一郎は思った。
ふと、座っている沙織の背中に、凹んだ金属バットが転がっているのに気付いた。部屋には無かったので、沙織が持ってきたのだろう。一郎は用心棒という仕事の片鱗を見た思いになり、憧れめいていた自分の気を引き締めなおした。

悠樹と屋敷の取材は滞りなく進んだ。悠樹の経営するサルベージの会社を訪ね、趣味の骨董品のコレクションの写真を撮り、先立たれた妻の泣ける話も聞いた。紙面を埋めるには充分な取材ができたといってよかった。
一週間住み込んで、その感想を書くというルポなので、一郎は十分な取材ができた後も屋敷に滞在していた。ほぼ旅行のような気分で、とある日は半日以上、縁側に座って海水に足を漬けながら、ビルとビルの間を流れていく雲を眺めていたこともあった。
水上沙織ともよく話をした。彼女は埼玉に来たことがないらしく、一郎のする都市の娯楽の話や科学技術の話を興味深そうに聞いていた。ただ、いつも傍らには凹んだ金属バットを持っていた。

最終日、一郎はもはや寝慣れていた自分の布団から飛び起きた。廊下から、けたたましいサイレンの音が響いていた。
急いで廊下に出て、悠樹の部屋に向かう。すると、ちょうど襖を開けて悠樹がゆっくりと出てくるところだった。
「なんですか、これは」焦って詰め寄る一郎。
「海賊です。別の離れに、カメラで監視している者がおりまして……」
ふだんの朝と変わらず、悠樹はゆっくりとした口調で言った。いつも一郎に話すように、少し笑みさえ浮かべていた。
「もうすぐここに来るんじゃないでしょうか」
「ええ！？」一郎は飛び上がった。海賊といったら、海上で船を、あるいは海に近い家を襲って、金品を強奪する連中である。それがもうすぐここに現れるとしたら、早く逃げなければならない。
そこでぷつりと、サイレンが止まった。
一郎が不審に思ってあたりを見回していると、廊下の奥から、多少息を切らして、沙織が現れた。
「ふぅ」沙織は、まるで一仕事終えた後のように息を吐いた。「切ってもらってきたぞ」
「海賊はこっちに向かってる。カメラで見た分には、結構いたぜ。船は三隻。人はたぶん、十人ぐらいかな。みんな銃を持ってるし、船も性能がよさそうだった」
そのまま、ただ事務的な口調で二人に説明を始めた。悠樹はふんふんと頷いている。
「いやいや！」一郎は二人の顔を見比べて、信じられないといったふうに叫んだ。「逃げないと！　勝てませんよ！　ホラ！」
用心棒と言っても、この屋敷にいるのは、金属バットを持った沙織ひとりである。武器もなにか隠しているのであれば別だが、それにしても一人でどうにかなるものだとは到底思えなかった。
沙織は一瞬ポカンとし、そして突然また息を殺して笑い出した。「まあ、大丈夫だよ」
「大丈夫ですよ」と、悠樹も落ち着いたまま一郎を見返してくる。
一郎が唖然としていると、沙織は「そうだ。見るか？」と言って、また廊下の奥に行ってしまった。悠樹は一郎を自分の部屋に招き入れる。
悠樹の部屋は他と変わらない和室で、地窓からの朝日によって室内は明るい。もうすぐここに暴力が訪れるとは思えない静かさである。一郎は悠樹に手招かれ、渋々ソファに腰かけた。
少しすると、ぱたぱた廊下を駆けてくる音がして、沙織が戻ってきた。手にはノートパソコンを持っていた。
ノートパソコンが、画面を開いた状態で一郎の目の前の机に置かれる。それを見ると、画面には廃墟の海を走る三隻の船が映し出されていた。廃墟のビルにつけた監視カメラのようで、船が画面から消えるたび、映像が別のカメラに切り替わり、船の姿を捉え続けた。確かに、何人かの銃を持った人間が乗っているのも見える。

一郎が映像に気を取られたまましばらくして、カメラが切り替わると、今度は船の目指す先に、大きな日本家屋があるのが映った。一郎はこれ以上ない寒気に襲われた。

しかし、沙織はにやにや笑っていた。一郎の肩から顔を出し、ノートパソコンをいじって何かの画面を表示すると、

「スイッチオーン」

と気の抜けた声で言って、エンターキーを叩いた。

すると、ゴゴゴ……と音を立てて、屋敷全体が震え始めた。机がカタカタと鳴り、置いてあったメモ用紙が床に落ちる。外を見ると、接地していたはずの海がだんだん離れていく。どうやら屋敷全体が、上に動いているようだった。

一郎が驚いてあたりを見回していると、「画面、画面」と沙織が笑いの混じった声で囁いた。つられてパソコンを見る。

カメラを通して見る、平静を保っていた海には、屋敷を中心とした大きな渦潮ができていた。わずかに上に移動した屋敷の下からは、それと同じぐらいの横幅のビルが顔を出し、そこの窓という窓から海水が吸い込まれていた。船はバランスを崩し、あっという間に転覆した。逆さ、あるいは横倒しになった船から、混乱した海賊たちが溺れながらも脱出してくる。

「どうだ、凄いだろう。あたし特製の巨大罠だぜ」

満面の笑みを浮かべて、沙織は大仰に手を広げた。そのまま、大好きな玩具の解説をする子供のような早口で、語り始める。

「建材にだって贅を尽くした日本家屋だし、骨董品集めが趣味だって言ってあるから、遠くから見境なく壊すような真似はしない。中の武力を警戒してダイバーを使って下見をしたら、住人は屋敷の主人のひょろっちい爺さんと、脳筋みたいな女ひとり。今週はもう一人、埼玉から来た男もいたか？」そこまで言って、沙織は自分の悦に入った語りに気づき、こほんと咳払いした。

「まあどっちにせよ、外から来る奴はこれでどうにかなる……」

沙織がもう一度エンターキーを押すと、体勢を立て直しつつあった海賊たちが画面の中で一斉に痙攣し、動かなくなった。

一郎は沙織が何か理解できないことをしたと感じたが、よく考えると、電気を流したんだろうという推測がたった。

「じゃああたしはあいつらが起きないうちに、船と装備をかっぱらってくる」

沙織はそう言って、部屋の襖から出ていこうとした。しかし、一度向き直ると、ずっとソファに座って黙って一郎の様子を見ていた悠樹に、意地の悪い笑みを向けた。

「また資産が増えるな、フジヤマさん」

そう言われると、悠樹は沙織に向けて、にっこりと笑顔を浮かべた。